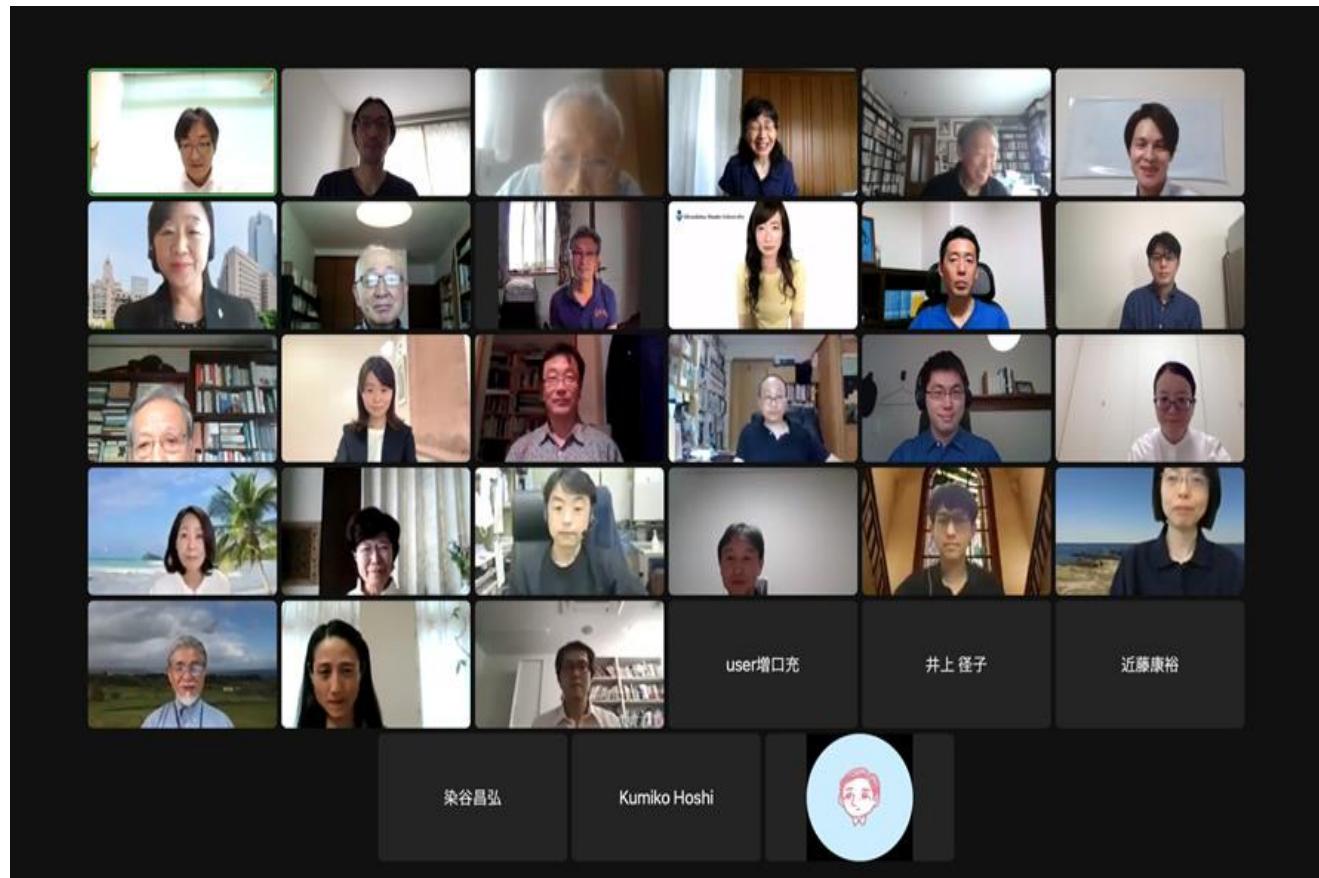


# 日本レンズ協会 第53回大会報告

(2022年6月19日 オンライン開催)

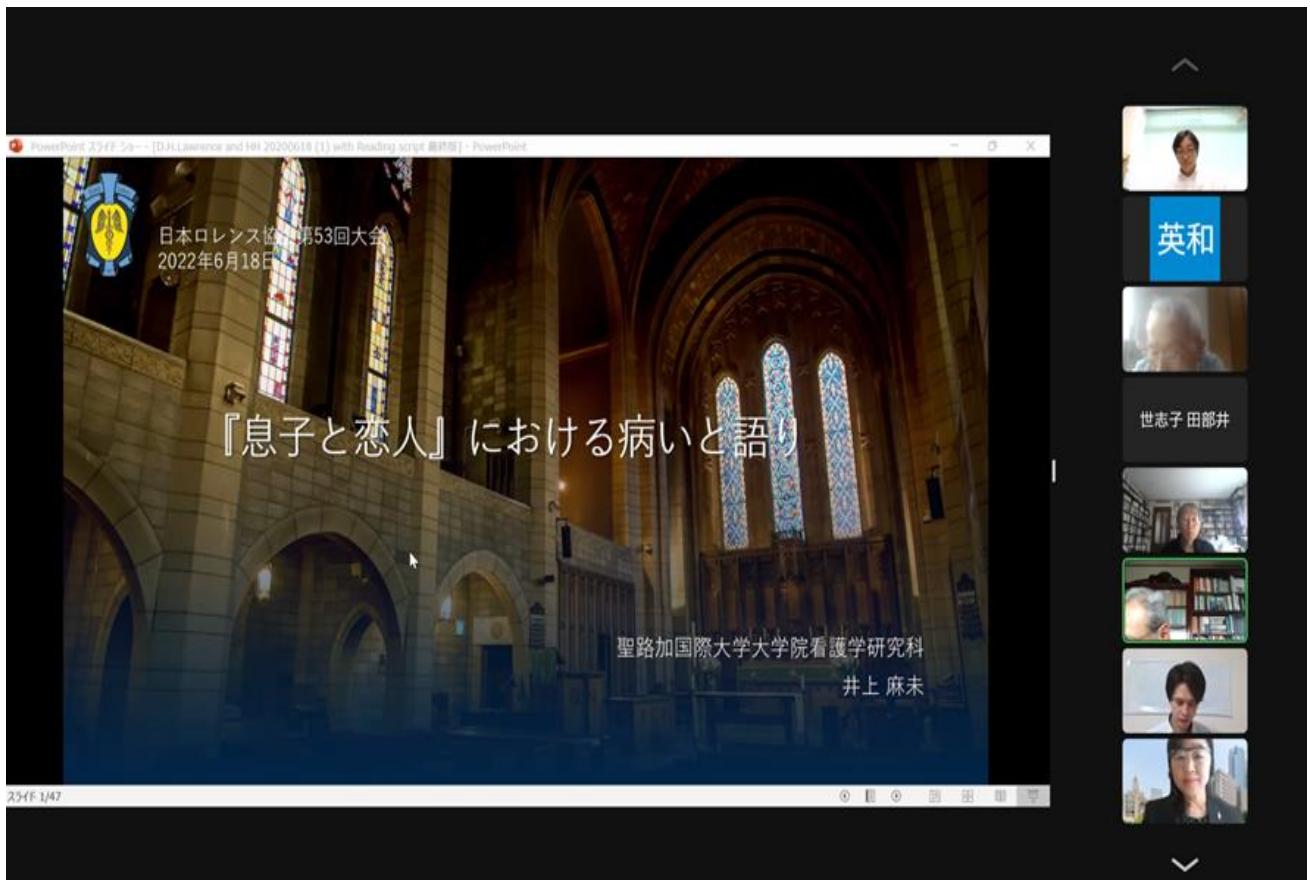
本年も開催校として準備を進めていたいた高知県立大学での大会実施の可能性を模索してきましたが、新型コロナウイルス感染症は未だ収束せず、オンラインでの開催となりました。開会にあたり田部井世志子会長より、今年の大会ではZoomのブレイクアウトルームでのオンライン懇親会も予定されており、楽しく有意義な大会になりますようにとのご挨拶がありました。本年は1日のみの大会となりましたが、英国からの参加者および協会外の方々の参加もあり、研究発表、シンポジウム、オンライン懇親会においてそれぞれ活発なディスカッションが行われ、充実した内容の活気にあふれた大会となりました。



## 研究発表

二つの研究発表があり、それぞれの発表の後、活発な質疑応答が行われました。

① 井上麻未氏（聖路加国際大学）の発表からスタートしました。司会は大平章氏（早稲田大学名誉教授）です。



井上氏は、「人文学・社会科学・芸術」と「医学・看護・保健」の創造的融合を図る学際的な取組が‘Health Humanities’という運動となり欧米を中心に展開されていることを示し、この新領域の世界的な研究動向を紹介されました。モダニズム小説において「病い」というテーマを‘Health Humanities’の視点から文学研究の手法で探る試みの可能性を示唆し、具体的には『息子と恋人』をはじめとする D.H.ロレンスの多層的な小説を病いと語りという視点から読み返すことで開かれるロレンス作品の新たな読みの可能性を明らかにするご発表でした。

② 次は武藤浩史氏（慶應義塾大学名誉教授）のご発表「*Aron's Rod*のスピリチュアリティ——出版 100 周年を祝して」です。司会は浅井雅志氏（京都橘大学名誉教授）がつとめられました。

## Aaron's Rodのスピリチュアリティ

出版100周年を祝して



武藤浩史（慶應義塾大学）



D.H.ロレンスの *Aaron's Rod* そしてジェイムズ・ジョイスの *Ulysses* が共に出版 100 周年を迎える記念すべき 2022 年、今こそ *Aaron's Rod* をもう一度ぜひ読み直したいという思いが湧き上がってくる出版 100 周年にふさわしいご発表でした。チャールズ・ティラーの言う「世俗の時代」にロレンスもジョイスも ‘spiritual’ を読み替え、ロレンスは靈肉 2 元論を解体しつつ、『ヨハネ福音書』(3:8) の聖靈の風の動きを主人公と彼のフルートに体現させるといったかたちでその読み替えを表象しているという斬新な *Aaron's Rod* 解釈が披瀝されました。

### シンポジウム

#### 「D.H.ロレンスの言語表現の独創性」

本年は、若手 4 名によるシンポジウムです。司会の大山美代氏の「伝統的なテキスト分析の手法を守り、言葉や表現を通してロレンスという作家の思想や人生にもう一度せまるということをやってみたい」というごあいさつ通り、以下、4 名が「D.H.ロレンスの言語表現の独創性」を軸にそれぞれ独自性のあるテーマでロレンス作品を論じられた圧巻のシンポジウムでした。

① 「ロレンスの“agony”と“anguish”をめぐる思想と表現技法の展開」  
講師 大山美代（広島修道大学講師）

日本ロレンス協会 第53回大会  
シンポジウム

**D·H·ロレンスの言語表現の独創性**

ロレンスの“agony”と“anguish”をめぐる思想と  
表現技法の展開

大山 美代 (広島修道大学講師)  
Email: miyoyasukiyo@hotmail.co.jp

クラモチ サブロウ  
m Mami Inoue  
雅志 浅井  
雅志 浅井  
Hiroshi MUTO  
Hiroshi MUTO  
Miyo Oyama

② 「D.H. ロレンスの「多彩」な “darkness”」  
講師 加藤彩雪（大妻女子大学専任講師）

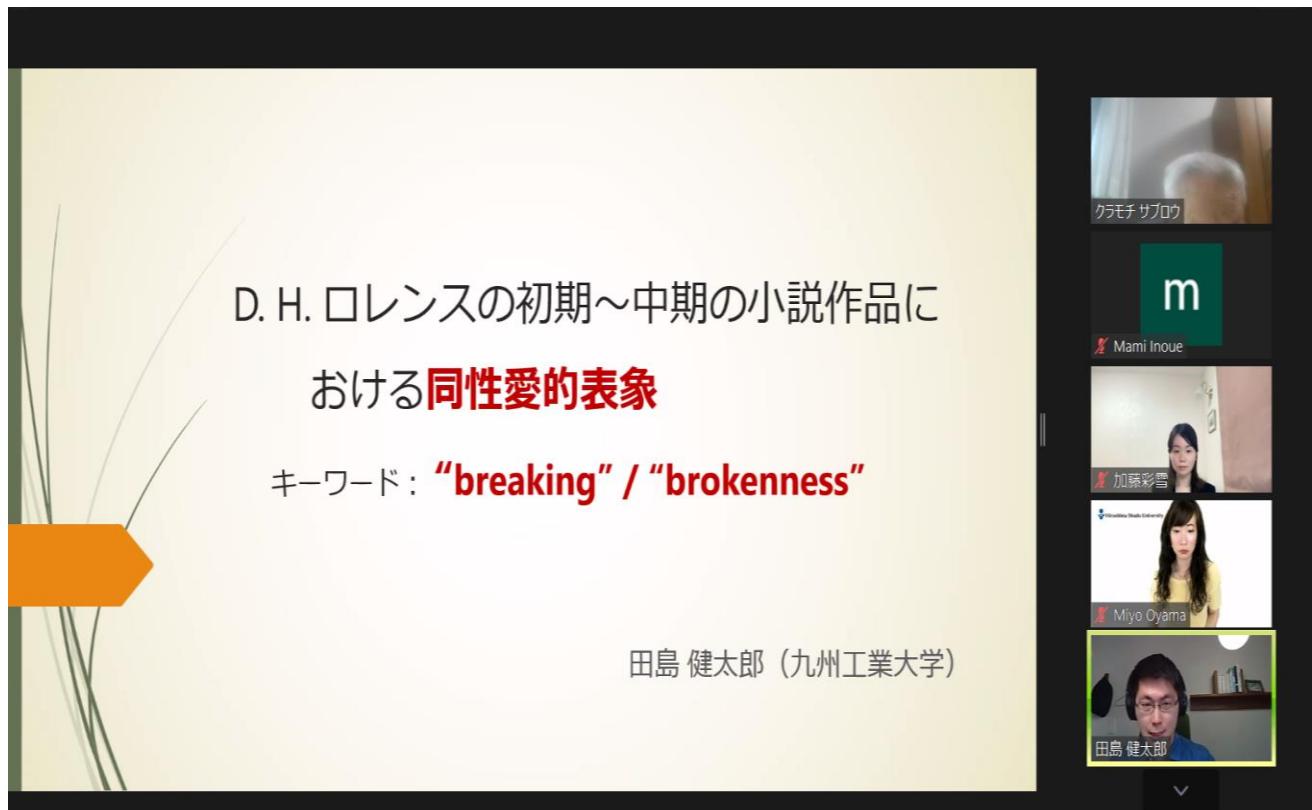
D. H. ロレンスの「多彩」な “darkness”

加藤彩雪 (大妻女子大学専任講師)

クラモチ サブロウ  
m Mami Inoue  
加藤彩雪  
Miyo Oyama

③ 「D.H.ロレンスの初期～中期作品における同性愛的表象」

田島健太郎（九州工業大学講師）



D. H. ロレンスの初期～中期の小説作品における同性愛的表象

キーワード: "breaking" / "brokenness"

田島 健太郎 (九州工業大学)

クラモチ サブロウ

Mami Inoue

加暮彩雪

Miyu Oyama

田島 健太郎

④ 「後期ロレンスにおける「純粹」探求の展開 —『無意識の幻想』から『翼ある蛇』、『チャタレイ夫人の恋人』にかけて」 大江公樹（早稲田大学大学院生）



大江公樹

m

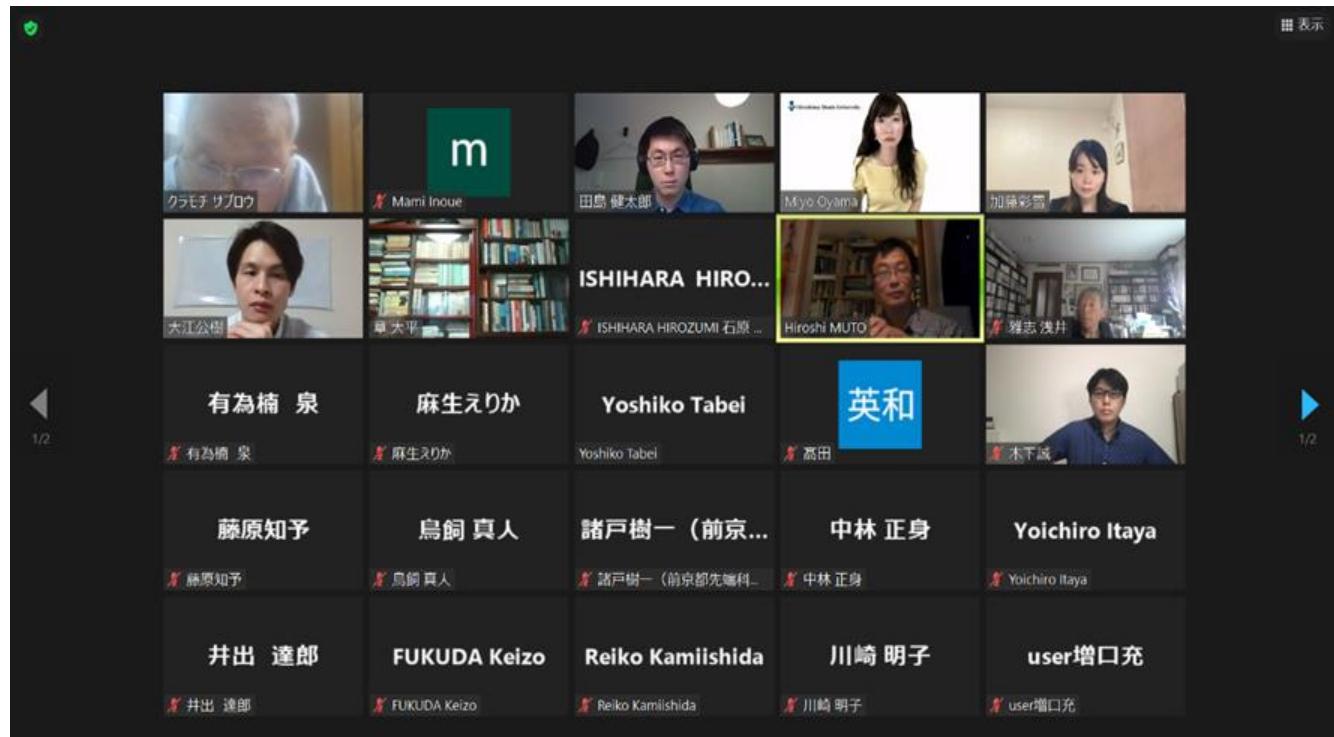
Mami Inoue

クラモチ サブロウ

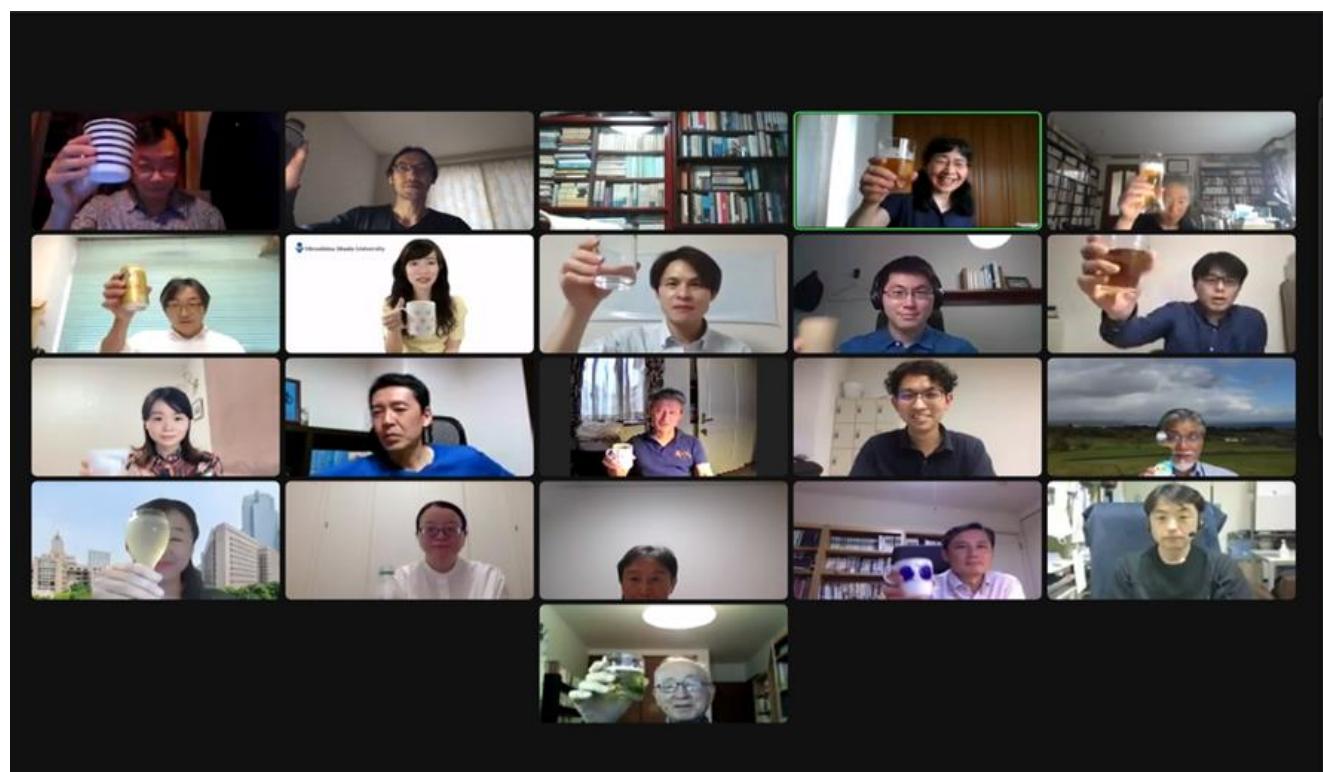
加暮彩雪

Miyu Oyama

以上、4名の大変興味深い発表内容の充実したシンポジウムとなりました。熱気あふれる質疑応答が交わされ時間が足りなくなりましたが、オンライン学会の特性を活かし、シンポジウムを大幅に延長することで十分な意見交換やディスカッションを行うことができました。



総会に引き続き、オンライン懇親会が開催されました。副会長の石原浩澄氏（立命館大学教授）の新会長就任のごあいさつの後、田部井世志子会長の「乾杯！」のご発声により、数年ぶりの笑顔での懇親会の開宴となりました。



ブレイクアウトルームでのグループに分かれての和気藹々とした懇親会は 20:00 過ぎまで続きました。

以上、本大会は成功裏に幕を閉じました。皆さま、本当にありがとうございました。

来年度の第 54 回大会は 2023 年 6 月に高知県立大学で開催予定です。来年こそは高知県立大学での開催がかないますことを祈り、皆さまとの再会を楽しみにしています。